

お念仏と共に ～ 如来に念じられて生きていこう ～



春の法要では「彼岸会」とかねて、お釈迦さまの誕生を祝う「降誕会」をお勤めします。

お釈迦さまは生まれてすぐ、七歩、歩いて、右手で天を指し、左手で地を指して、「天上天下 唯我独尊」と宣言された、と言いつたえられてきました。この誕生仏に甘茶をおかけして、お釈迦さまの誕生を慶ぶ行事が「降誕会」であります。

今でも、西別院の慈光保育園で覚えた花祭り行進曲（赤尾白嶺作詞・成瀬鉄治作曲 明治41年）が懐かしく思い出されます。

- ・ 昔も昔 三千年 花咲き匂う 春八日
響き渡った 一声は 天にも地にも われ一人
- ・ 円い世界の まん中に 教えの門を うち開き
かわける人に ふりまいた 甘露の水は 限りなし
- ・ 何年たっても 変わらずに 咲いたままなる 法の花
綺麗な一つを 胸にさし 我等もまげずに 励みましよう

ところで、勝福寺のお釈迦さま（誕生仏）は京都からやってきました。坊守がご本山でのお仕事を終え、電車に乗る前にふとのぞいた東寺の弘法市（骨董市）で、降りしきる雨の中そぞろ歩きをしていると、お釈迦さまが待っていてくれたそうです。

ずいぶん古く、お姿は法隆寺にある誕生仏とそっくりで、勝福寺に来るまでに、きつと多くの人々に甘茶をかけていただき、拝まれてきたことでしょう。

話は変わりますが、今は、政治指導者が恥ずかしげもなく平気で「嘘」を言う時代であります。世界中に不信と恐れが蔓延しているのも、神仏に帰依することを忘れて、エゴの側へと、人々の心が傾いてしまったからでありましょう。自業自得がこの世の道理です。どんな世界になっていくのか、心配ですね。

降誕会では、お釈迦さまに甘茶をおかけしましょう。そして、三千年の時を貫き、世界中の人々を包み取って、この私にまで届けられた「仏法」を崇敬する心を養っていきましょう。

平成30年勝福寺報恩講の様子を紹介します

一月二十六日から二十八日にかけて報恩講が執り行われました。今年も四日市地区が中心になってお磨きやお華束つき、お斎の用意をして下さいました。

初日の二十六日には、親鸞聖人750回御遠忌お待ち受け式が開催されました(5頁参照)。

夜席は末廣法崇師が、親鸞聖人のご生涯を絵で伝える「御絵伝」をスクリーンに映し出しながら「絵解き」をしてください、とても好評でした。

二十七日のお斎の後はアース・ハーモニーとコールハイマー(宇佐組合唱団)が、原爆病でなくなった「貞子の折り鶴」の朗読と「ねがい」「ソレアード」「故郷」「回向」を歌ってくれました。

ご法話は昨年につき、石川県からご出講下さった平野喜之師でした(くわしくは3頁の聞き書きを見て下さい)。

今年の報恩講の様子を写真でたどりながらご紹介いたします。



真剣な眼差しでお華束に色付けをしています



お華束餅の切り抜き「厚からず、薄からず」



仏具のおみがき。1年の錆も新品のような輝きに。



仏花と「ご絵伝」。夜席では「絵解き」がありました。



180人分の盛り付けの最中お煮染めを、いつまでも!



「どれ、どれ、味はいかがかな？」 仲良し三人組



迫力と慈愛に溢れた歌声に皆が聞き惚れました



ご講師のお話に聞き入る門信徒の皆さん



同朋唱和のおつとめが、本堂いっぱいになりました

お齋づくりの業々
 杵築市山香町 上条佳代

16年前まで上町で暮らしていましたが、ご住職様より「今年のお齋づくりに参加しませんか」と、お誘いを頂き、久しぶりに二日間お手伝いさせて頂きました。

初日、作業前、自己紹介の折に風さんが「藤谷風になりました」と言われ、皆様が見て「あれ、あれ、皆様が望まれていた事だけに、一瞬にして和やかな雰囲気になりました。毎年お手伝いされている麻生民子さん、渡辺美佐子さん、香田紀子さん、婦人会長の松尾さんを中心にお煮しめの下準備に取りかかり、百八十食分を数えながら流れ作業が進み、大きな鍋から良い匂いが漂い出し、手順良く午前中で終了しました。

二日目はおからのゆず和え、大根なます、カス汁作りなどで、どのお料理も目分量の匙加減なのに、その絶妙さに感服いたしました。若い風さんに徐々に味付けを覚えてもらいたいとの思いが端々に感じられ、また何事にも優しい純子さんの目差しに皆様、本当に楽しそうなお様子で、このお齋づくりがこれからも続けられて行くことを心から願っております。

勝福寺報恩講話

どうしたら 仏の国に生まれるか

平野喜之師



何のために生まれてきたんやろ

父ががんの手術をする2、3日前に「わしの人生は、仕事も趣味も充実していた。だけど、わしはこういうことをするために生まれてきたんやろるか。わしは、何のために生まれてきたんやろ」と言っただけです。僕はその時、アンパンマンのマーチの一節を思い出しました。

何のために生まれて

何をして生きるのか

答えられないなんて

そんなのは嫌だ!

何が君の幸せ

何をして喜ぶ

解らないまま終わる

そんなのは嫌だ!

父親が言っていることと全く同じだと思えます。その時は、厳粛な感じがして言えなかつたけど、父親は自分自身に会

いたかったんじゃないでしょうか。私たちは、自分自身に会うために生まれてきたんじゃないかと思えます

つぶやき

昨年、友達から浅田正作さんの「つぶやき」という詩を教えてもらいました。

台風の進路がはずれてくれ

ればそれでいい

こんなものが祈る世の中の安穩とはなんだろうか

この詩を聞いて思い出したのは、杉本さんという友人が言った言葉です。「人身事故で電車が停止したとき、それを知らせる車内放送を聞いて、『ああ、一人の人が死んだ』というのに、つめたいな』と思っ

た。ところが今日、講師として急いでいるところで人身事故があつて電車が停止したら、心の中で『ちえっ』という声が出た。『ああ、僕の心の中にも同じようなつめたいものがあるんやな』と気づいた。僕は、聞法生活というのは、出会った言葉によって自分自身の罪にうなずいていく生活だと思えます。この「つぶやき」という詩は、いろいろな意味で、自分自身の姿というものを照らし出してくれる

詩だと思えます。

地獄

浅田正作さんに「地獄」という詩があります。

他人の花が赤く見える

あさましや

これが無いものねだりの私が

おちる地獄

この詩を読んで嫁さんは、

「私もこんな思いをしている。この詩は救いようのない詩だな」と言いました。でも僕は、救いようのない詩じゃないと思います。「他人の花が赤く見える」ことを「あさましい」と思えることはすごいことやと思えますね。

我執の底にある自己

安田先生が「人間は二重底でできている」と言われています。ひとつは「我執」といって、自分の思いさえ満足できればいいという底。もう一つが「自己」と言われる底。僕は京都にある洛南高校の出身なんです、その校訓にある

「自己を尊重せよ」が「仏に帰依せよ」に対応しているというところが、長い間、分かりませんでした。しかし、安田先生の話聞いて、「自己を尊重せよ」とは、我執の底に

ある「自己」を言っていることに気づきました。

僕らは、どこかで、自分の外側に仏さんをイメージして、その仏さんに手を合わせることに「仏に帰依する」ことだと思つてますね。大谷大学で寮監をしていた時、学生さんから、「仏に帰依せよ」というが、

仏はどこにいますか」と聞かれたことがあります。たとえば、お釈迦さまを見て「仏」だと思えるでしょうか。「老人」としか見えないかもしれない。どうしたら私たちは「仏」と

知ることができるのか。安田先生は、この方は「仏」だといふ知恵というものが人間に与えられる。その知恵において「仏」と「人」は同等であると。「仏」を知る知恵、それは「あさましや」と見えてくる知恵。それが「自己」ということやと思えますね。

「仏に帰依せよ」と「自己を尊重せよ」は一つのことなんです。だから「あさましや」という声が出ていくところに「救い」というものがあるんじゃないかと思えますね。

『歎異抄』第四章で言われている「浄土の慈悲」は、「あさましや」ということを照らし出してくれる光やと思えますね。

浄土からのスタート

浅田正作さんの詩には、はげまされる詩もあります。それが「始まる」という詩です

己の地獄発見

そこから仏法がはじまる

己の地獄深くして底なし

ここから真の人生が始まる

本当の自分はどういう身を生きているのかということに気づいて、そこからはじめて人生がスタートしていくんだという詩です。浄土は目標としてあるのじゃなくて、浄土からスタートしていく、ということですね。今日は、「仏の国」という言葉は使っていませんが、「仏の国に生まれる」話になっているんじゃないかと思つています。

(聞書き担当者感想)

自分の思いがあてにならないということを知って、自分の姿を照らしてくれる仏の智慧に出会い、本当の自分に気づいて、そこからはじめて真の人生がスタートしていく。それが「仏の国に生まれる」ことの内容であるとお聞きしました。

南無阿弥陀仏 (釈和敬)

ご門徒さん こんにちは！

第十一回

今回は、4年前に父親の保険事務所を手伝うため、勤めていた会社を辞めて四日市に帰って来られ、本業はもちろん、商工会など色々な方面で活躍している渡邊浩晃さんをお訪ねしました。

浩晃さんは今年三十六歳、元氣闊達という言葉がまさにぴったりの好青年です。

浩晃さんは横浜で生まれましたが、小学校入学前に父親の仕事の関係で四日市に帰ってこられました。父親の孝純さんは四日市を愛してやまない人で、四日市の町並み保存などで活躍してこられました。その薫陶を受けて育った浩晃さんは小・中・高校は四日市、大学時代は神奈川で過ごしました。その大学時代はパワフルで、専攻の経済学のほかに、史学とデザインも4年間で履修したそうです。

卒業後は商社に入り、日本と韓国の間を往復する多忙な生活を送りました。5年後、

会社の先輩と人材派遣会社を起業し、保険会社に派遣されましたが、仕事ぶりが役員の方に留まり、保険会社に移ることにになりました。そこで7年間、過ごすことになったのですが、2011年3月11日、東日本大震災が起こりました。保険会社ですから、災害に遭われた契約者の被害調査を行わねばなりません。でも東北地方の支店は壊滅状態。支店の復旧と調査応援のため、

情熱もバトンタッチ 渡邊浩晃（四日市）

浩晃さんも震災から二週間後には仙台に応援に行きました。

ところが仙台は、避難者で宿泊施設は満杯。浩晃さんは隣県の山形市から、唯一、通じていた高速バスで、毎日4時間かけて仙台まで通ったそうです。会社に着くと、ナビをたよりに車で契約者の家に調査に向かいますが、ナビの画面では建物があるのに、目の前には何も無かったり、苦労してたどり着いても、そこには津波で土台部分をえぐら

れたり、地震で戸の開閉が出来なくなっていたそうです。そんな中で今でも忘れられないのは、以前は家があったはずの空き地の座敷らしい位置に、近所の人でも拾って置いてあげたのか、その家の主人らしい人の写真が飾られていた光景です。そんな光景をあちこちで見たいヶ月間の東北でしたので、東京に戻ってからしばらくは、同僚から「変だった」と言われたそうです。

です。

2015年に7年間勤めた会社を辞めて四日市に帰ってきました。以前から帰ってくるように父親から言われていましたが、仕事が面白いのでずっと断り続けていました。でも、交通事故の後遺症で身体が不自由になった父親から、寝たきりになった妻の介護に専念したいと言われ、子どもとして「これは、もう、帰るしかない」と、ようやく決断したそうです。

さて、代表的な若者の浩晃さんに「若者のお寺離れ・仏教離れ」について聞いてみました。

浩晃さんは「決して若者は、お寺離れも仏教離れもしていない」と答えてくれました。

「表面的にはそう見えるかもしれないが、根っこの部分で



響流くん初参り

は心の拠り所を求め続けている。でも、それが理解されないのは、大人がお寺や仏教

（真宗）の意義を教えていないから。きっかけさえあれば変わるんじゃないだろうか。たとえば、勝福寺の門徒さんであれば、私達の先祖が守ってきた勝福寺や四日市別院（真勝寺）の歴史を伝えていくとか」

と熱っぽく語ってくれました。次に、浩晃さんに仏法との関わりを尋ねてみると、「東日本大震災をまじかに見た時、『何も無くなってしまった、諸行無常なんだ』と感じたことが大きく影響していると思う。それから、仏様の前に座って手を合わせると、肩の力が抜けて『ハーア』と息が出来る。なんだか背負わなくてもいいものを降ろせる場所に来たみたいだと思う」と話してくれました。

浩晃さんに昨年、二人めの子どもが生まれました。その子に「響流（こいうる）」と名前を付けたそうです。「響流」は勝福寺の山号「響流山」でもありますが、その意味は、仏の教えが十方に響き流れるように、ということ。また、「こいうる」は英語の「call」（呼ぶ）にも通じるし、日本語の「恋うる」にも通ずるところから考えたそうです。

仕事もお寺も、親からバトンを着実に受け継ぎつつある浩晃さん。その若さ溢れる力を、若い人も関心を持って集めるような勝福寺になっていくように、お貸し下さい。

（文責 渡辺 重昭）

響流山勝福寺・
宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌
お待ち受け開会式

報恩講の初日（1月26日）に御遠忌のお待ち受け開会式が開かれました。その様子を紹介します。（渡辺重昭）

看板・垂れ幕除幕式

式は、渡辺久仁子さんの進行で進められました。最初に向野茂御遠忌委員長が挨拶で「長い期間ですが、皆さんと共に続けて行きましょう」と述べられた後、本堂正面の柱に掛ける看板と本堂内にかける垂れ幕の除幕式が行われました。



看板を書いってくれた後藤さん

看板の除幕は、揮毫をしてくれた大塚の後藤啓一郎さん、垂れ幕の除幕は四日市の森崎智子さん。お二人は「このご縁を大切にしたい」と話してくれました。この看板と

垂れ幕は二年間、皆さんをテーマのように暖かく迎えてくれます。



垂れ幕が披露される瞬間

続いて短冊を書いて下さった丸野寿夫さん、渡辺昌敏さん、後藤啓一郎さん、森崎智子さん、向野理恵さんと坊守さんが紹介されました。



短冊を書いってくれた方々

坊守さんからは、「最初は印刷した短冊にしようと思ったが、お金もかかるし、心を伝える意味でも手作りしたい」と思い、ご門徒さんに書いてもらいました。でも一人に四十枚づつお願いしたので大変だったと思います」と、エピソードを話してくれました。

御遠忌音頭の発表

次に「御遠忌音頭」を、香田紀子さんの口説きと藤谷信さんの太鼓の伴奏で、婦人部の八人がお揃いの藤色の手拭

いを肩にかけ披露してくれました。踊りの最後には、



全員で「親鸞様なぜお念仏なの？ 出会おう 語ろう 今こそ」と声高らかに読み上げ、会場を盛り上げてくれました。

共に学びましょう！

最後に、佐藤麗子さんが感話で 仏法を学び実践するサングになるよう足を運びます。

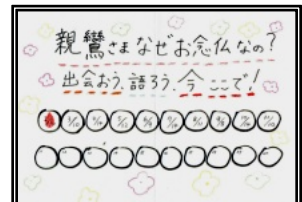


そして、ありがとうという感謝の気持ちで二十回ある聞法会には全部出席します。皆さん方も一緒に学びましょう」と力強く決意を語ってくれました。

聞法会 はじまる

記念事業の一つである「お待ち受け聞法会」が二月十日（土）午後1時半、スタートしました。

た。受け付けで資料とその資料を綴じるバインダーをもら



い、出席カードに「アサガオのハンコ」を押ししてもらおうと思わず子ども時代の夏休みのラジオ体操を思い出しました。住職と純子坊守さんのお話しを聞く楽しみと共に、カードがハンコで埋まってくいのも楽しみになりそうです。



なお、最初の10回は、住職さんが、釈尊や親鸞聖人の教えと生涯について、坊守さんが、お念仏の生活を送った「妙好人」についてお話ししてくれます。時間をさいて、一緒に聞きましょう。

今後、前回の法話の概要と受講者の感想をまとめた聞法会通信をつくり、総代さんを通じて全門徒に配布していく予定です。

御遠忌便り

○アンケート実施

「お寺のあり方を考える取り組み」の一環として、ご門徒の皆さんにアンケートを実施しました。ご協力ありがとうございました。

- 配布世帯数 一九〇
- 回収世帯数 一五〇
- （うち回収枚数二〇九）
- 回収率 七九%

現在、御遠忌委員会組織部会で集計及び分析作業中です。集計及び分析の結果については、今後の勝福寺のあり方を考えていくうえで活用させていただきます。また、結果については次回の「ひびき」でお知らせする予定です。

○勝福寺史の作製

渡辺重昭さんと渡辺浩晃さんが中心となって、今後、資料収集や勝福寺の歴史を知る方々への聞き取り等を行っていく予定です。

*「御遠忌記念事業」については、来年の御遠忌法要に向けて御遠忌委員会が取り組んでいます。お気づきのことがありましたらお寺までお知らせ下さい。

御遠忌委員会事務局長

渡辺和義

福島の人々へ大分の農産物を送る会。終了

2011年10月より続けてきた、宇佐の大地でできた野菜や果物を福島の人々へ届ける事業は、今年1月の72回目で終了することになりました。ご協力有り難うございました。

子どもたちや料理の写真、お礼のたよりもいただきました。



心のもった贈り物 ありがとう

プローチ、ストラップ、プラバン、子どもたちの心のもった贈り物をたっぷりいただきました。

食員の皆様へ
まもなく震災から七年目の当日がめぐってきます。会議で、過去協力して下さった方々を振り返りましたところ、50名を超える方のお名前が確認されました。カンパや宛名書き、野菜の提供、発送作業と様々な形でのご協力の支えがあったことを感謝いたします。チャイルドからのたくさんの贈り物は、ご協力くださった方々を中心に分けさせていただきます。長い間のご支援、有難うございました。これをもって最終号と致します。

発行一福島のみなさんへ大分の農産物を送る会
代表一藤野知通 事務局一林 貴子
住所一宇佐市日野1-2-3 勝福寺内
電話番号一0975-32-1806

2011年3月11日、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の大地震がおこり、その津波で原子力発電所が制御不能に陥って原子炉建屋が爆発、福島を中心に東北から関東にかけて命を脅かす放射能汚染が起きてしまいました。

放射能の恐ろしさは遺伝子を傷つけることです。そのため幼い命ほど被爆の危険性は高まります。しかし、原発事故から7年がたち、仮設住宅の方は退所が進んだこと、ピーターパンチャイルドクラブの方からは、状況が改善されつつある、というところで支援助を遠慮したい旨のお便りをいただきました。それを受けて話

し合いをした結果、これをもって定期的な発送は終了することに決定しました。今後は、子どもたちに喜んでもらえそうなものがあつた時、個人的に送らせてもらうことにします。長い間ご協力有難うございました。

松居友さんの講演と子どもたちの民族舞踊

日時 4月25日午後1時半
会場 勝福寺本堂

フィリピンの子どものミンダナオ島で、修学困難な子どもたちに学業支援を続けている松居友さんが、ミンダナオの子どもたちを連れて、今年も、勝福寺に来てくれることになりました。

ミンダナオ島はフィリピンからの独立を目指す内戦が50年近く続き、戦災孤児や極貧の子どもたちがたくさんいます。たまたまフィリピンを訪れてそれを目にした松居友さんは、子どもたちに笑顔を届けようと、絵本の読み聞かせを始めました。それが次第に広がって、



日本からも多くの支援者ができ、今では三百名近い子どもたちの就学支援を行っています。特に百名近い子どもたちとの共同生活はキリスト教徒、イスラム教徒の垣根を超えた人間関係を生み出しています。

昨年はその中から10名の子どもがやってきて、ミンダナオ島の竹を使った民族舞踊や歌を披露してくれました。よく聞けば、想像することもできぬような厳しく悲惨な過去をもちながら、彼らにあふれる笑顔のなんと輝いていたことか。

日本の子どもは本当に幸せなのか。彼らの上にのしかかっている、お金が世界を支配する現代社会の非人間性に、どう立ち向かったらいいのか。いろいろと考えさせられる出会いでもありました。4月の公演で、ぜひとも彼らと出会っていただきたいと思えます。

春等彼岸会法要

日時 4月16日(月)
昼席 1時半
夜席 7時半
4月17日(火)
昼席 1時半

講師 川村妙慶先生



「同朋新聞」に「ミカタがカワル？」というコラムを担当している川村妙慶先生。仏さまの教えを、たとえを通しながらやさしくお説きくださります。ぜひ、一緒にお聞きしましょう。

へあとがき

今回のインタビューは、若い方にお願ひしました。話しを聞いてみると、人生経験豊富なお年寄りにも負けないほどの体験を話してくれました。特に東日本大震災での体験は想像を絶するお話しでした。テレビ等を通していろんな出来事を聞いていましたが、実際に自分の目で見て、体験した方の話しの重さは想像以上でした。震災から1年も経っていますが、改めて被災者の皆さんにお見舞い申し上げます。(渡辺 重昭)